「君の火がゆらめいている」を読んで

中里幸暉

「きょうだい児」を知っているだろうか。

私もこの本を読んで初めて、きょうだい児のことを知った。きょうだい児とは、障害や重い病気のある兄弟や姉妹がいる子どものことだ。私の妹は障害をもっているため、私はきょうだい児ということになる。私は初めて、自分に「きょうだい児」という名前があることを知り、きょうだい児に興味を持った私は、この本を手に取った。

主人公の葉澄には、障害をもつ双子の姉の菜々実がいる。葉澄も私と同じきょうだい児だ。葉澄は、親友の倫とけんかするなど、菜々実のために自分が我慢することに疑問を持ち始めた。そんな中、葉澄は恵太に出会う。恵太も葉澄と同じきょうだい児で、恵太の弟の聖人が障害をもっている。恵太に出会ったことをきっかけに、葉澄はきょうだい児が集まるきょうだい会「つなぎび」に入った。葉澄は気の合う恵太と話をしたり、つなぎびの活動に参加したりすることで、日頃の悩みを

20 × 20

解消していき、自分の居場所をつくることができた。

本を読んでいて、葉澄のクラスメイトの柳沼くんの言葉が特に印象に残っている。「そもそも、障害者自体、生きてるメリットないじゃん。」この言葉を読んだとき、人が生きる意味とは何なのか、疑問に思った。生きる意味について何度も考えを巡らせるうちに、「人間全体に共通する意味はない」のだと思った。なぜなら、人によって価値観や性格、能力はそれぞれだからだ。「スポーツをする意味」を例にしてみると、「大会で優勝したい」から」という人もいれば、「友達とスポーツをすることが楽しいから」という人もいるだろう。このように、人によって生きる意味は全く違うのだと思った。そして、だからこそ、柳沼くんのように人の人生について口出しすること自体が、おかしいとも気づいた。

さらに、本を読んでいて特に印象に残った場面が、高校生が電車に興奮している場面だ

。高校生が電車に興奮して、大声を上げて飛び跳ねると、周りの人はさあっと離れていき、こう言った。「気の毒に」、「あれじゃあ付き添いの人も大変だね」、「おとなしくできないなら外に出さなきゃいいのに」。私は、世の中を見ていると、障害者が避けられたり否定されたりすることが多いと感じる。障害のある妹と家族で博物館に行ったときも、テレビに興奮して声を上げ、なかなか前に進めない妹に対して、「うるさいな」、「早く前に行けよ」と言われているような冷たい視線を感じた。なぜ冷たい視線を浴びるのか、わからなかったが、葉澄の担任の紺野先生の言葉で気づくことができた。「まずは相手を知ること。理解や共感はその先の話。だけど、ただ知るだけでも、おたがいに刺激になる。考えや行動が変わるきっかけになるかもしれない。」障害を身近に感じている自分と違って、周りの人は障害についてくわしく知らないからなのだとわかった。

　恵太のある言葉を思い出す。「生存する人の全員が健常者で、障害者は排除されて成り立つ社会があるとしたら、そこに豊かさとか、発展とか、やさしさはあるんかな。そこは本当に、人間の住む世界なんかな。」文の大かな意味は理解できたが、「人間の住む世界」という言葉が気になる。「人間の住む世界」とは何なのか。私の思う「人間の住む世界」は、「お互いがそれぞれの価値観を尊重し合う世界」だ。十人十色というように、人にはそれぞれの性格や能力、特性がある。だから、自分と違う人を否定しないことで、世界中の人が気持ちよく過ごすことができると考えた。

　この本を通して、私は「きょうだい児」という存在を知ることができた。そして、人それぞれの生き方や価値観を尊重することの大切さを改めて考えることができた。障害の有無にかかわらず、一人ひとりが安心して自分らしく生きられる社会こそ、本当に豊かな社

T-2-6

5

会だと思った。そのためには、まず相手を知ろうとする姿勢をもち、違いを認め合いながら支え合うことが必要だ。この本は、私の経験と重なり、多様な社会について深く考えるきっかけとなった。

20 × 20